

化學兵器寫真帖

1934年版



毒ガス中に於て伊國突撃部隊と對戰する埃洪國軍
(『ヘルマダ』の戰) が手擲彈を投擲して奮戰の狀況

陸軍科學研究所高等官集會所

編 纂

序

今や一九三五―六年は目睫の間に迫り國際間の情勢は全く混沌として其歸趨する所を知らず愈々國家總動員の下に萬一の場合に備へざるべからざるに至れり。

想ふに列國間には國際條約あり戰時國際法の存するありと雖、戰時意識の高潮するところ只一片の空文に終ることなきを保せず決して一時の儉安を貪り悔を千歳に遺すの愚を學ぶべきに非ざるなり。近時屢々防空演習各地に行はれ頻りに國民的準備訓練實施せらるゝも亦故なきにあらず。陸軍科學研究所茲に見るところあり、即ち本書を輯録して巷間に普及し、國民をして化學兵器の性能を理解せしむると共に、防護の方法を知悉せしめ以て他日有事の日に備へんとす。

其企劃適切内容亦整ひ非常時國民に裨益する所蓋し鮮少ならざるべし。敢て序となす。

昭和九年七月

東京警備司令官

陸軍中將 西

義 一

序

本寫眞帖は陸軍科學研究所に於て一般軍人、在郷軍人、青年訓練所、其他官公私諸團體等の教育上參考に資せんとして編纂したものである。輒近世界各國に於ける軍事科學の進歩は實に顯著なるものがあり、就中航空機の發達に伴ひ化學兵器の運用範圍は頓に擴大し、將來戰に於ける毒ガスは戰場より遠く國內都市に及ぶことを豫期せねばならなくなつた。従つて其研究の重大なるを認めるのは獨り軍部並専門家の間に於てのみならず、一般國民と雖平生十二分の關心を以て之が知識を會得し、一朝有事に際して周章狼狽せざるの覺悟が無ければならぬ。

歐米列國は夙に此に着眼し軍民競つて化學兵器防護訓練等に餘念が無いといふのも蓋し當然の事である。此くの如き現下の情勢に鑑み今回本帖を公刊し一般の知識普及に資せんとする次第である。若し夫れ之に依り國民一般の國防觀念養成の一助とならば幸甚之に過ぎざる所である。

昭和九年七月

陸軍科學研究所長

陸軍中將 久 村 種 樹

改 版 序

現下世界の大勢を按ずるに、列國の政治經濟外交に於ける關係は機微を極め國際協調主義の高唱裡陰に軍備の充實に狂奔し事態一度惡化せば敢て國際信義の蹂躪をも辭せざるもの無しとせず。

惟ふに輓近學術は益々進歩し人智は日々に發達し科學の進展は駭々乎として底止する處を知らず、一度戰禍至れば之を巧に戰鬪に應用し奇襲以て敵の機先を制し即戰即決に依りて制勝の計を達成せんと努むるは必然なり、仍ち諸外國は近代科學の精髓たる化學兵器を以て其秀逸を爲し互に對者を凌駕せんとして之が整備に汲々たるが如し、蓋し化學兵器の威力たるや時間空間を超越して在來の彈藥火器に求め得ざる作用を發揮し而も某國等の主張するが如く之が運用は最も人道的なればなり。

由來有毒物質を以て敵を壓倒せんとするの着意は舊く有史以前より存したりと雖毒物が眞に化學兵器として登場せしは歐洲大戰間の事なり、爾來諸外國は之が研究改良に腐心し今や『戰爭の存する限り、化學兵器亦之に隨伴すべし』との懸念も遂に眞理として認容するの外なきに至れり、固より之が使用には國際條約上の制肘ありとするも其威力果して上述の如くんば一朝事に臨みては之が禁制を破棄する者の生ずるは明白なり。

依て吾人は不幸之に遭遇したる場合に於ても動することなく所要の處置を以て毒ガスの作用を無効にし我が犠牲を最少限度ならしめ以て國防の完璧を期せざるべからず、這是帝國軍民共同の責務にして之に備ふる爲には敵の攻撃法、使用器材、防護法等に精通するを第一要件とすべし、然るに從來化學兵器は其性質上一般人士間に於ける研究不十分にして又適切なる教育資料に乏しく不便を啣つこと屢々なりき、之れ實に本書を編纂し汎く頒布せしむる所以にして化學兵器は其特殊性に鑑み材料の蒐集極めて困難なるものあり、茲に掲載する處未だ完全を期し得ざるの憾なしとするも尙能く上記の目的に適合し軍關係者は勿論一般人士と雖取て以て參考とするものあるを信じて疑はざるなり、願くば官公衛諸團體は固より個人に於ても各一本を備へ之が知識の普及を計り有事に臨みて噬臍の悔無からんことを期せられよ、敢て一文を草して改版の序と爲す。

昭和九年七月

編 者 識